

祈りの力

—— グレグ・ブレードンに聞く

☆

この記事は、ECCJ 有志、及び翻訳部スタッフによりメンバー専用掲示板上で共同翻訳されたものです。

☆

航空宇宙コンピュータシステムの設計者であり地球科学者であったグレグ・ブレードンは、ニューヨークタイムズのベストセラー『イザヤ効果 (The Isaiah Effect)』の著者である。

彼は科学と霊性を融合することにより、希望と可能性に満ちた、あくまでも前向きで人生を肯定するメッセージを発信している。

また、古代の習わしが現代の我々にとってどのような意味を持つのかを見つけるために、これまで人里はなれた山村や、修道院、寺院などの調査も行っている。

ベンチャー・インワード誌の編集長、ロバート・スミスが聞いた。

☆

ロバート・スミス： あなたの本『イザヤ効果 (The Isaiah Effect)』では、1998年にイラクと国連が危機的状況にあった時に、世界的規模で行われた祈りのパワーについて述べられていますね。

イラクが国連の査察団の入国を拒否したために、イラクの軍事施設に対する爆撃が準備された。

しかし、突然爆撃は中止された。

科学者であるあなたはこの結果を、祈りの力のためだと述べられた。

その根拠は何ですか？

グレグ・ブレードン： 私は、祈りとはどのようなものを説明するための一つの例として、それを取り上げました。

実は何ヶ月もの間、ある決められた日時に、地球規模で平和の祈りを捧げる準備が進められていました。

イスラエルとパレスチナのためになすすべはありませんでした。

イラクやアンゴラ、ベルファスト、それに世界中で起っている同様の出来事に対してもそうでした。

祈りは特に対象を特定したものではありませんでした。

それは、ただ単に平和を祈るものでした。

世界に既にある平和に、感謝するのです。

ある古代の真理は、全ての被造物の一体性について語っています。

それによると、私たちが、祈りはすでに聞き入れられている、という感覚を持つとき、また、平安だと

いう感覚を持つとき、そしてすでにある平和に感謝するとき、そのようなときに私たちは、より大きな平和を生み出しているのです。

そしてその通りのことが、実際に起ったのです

その晩、わかっているだけで 84 カ国の、少なくとも数十万人の人々が一斉に祈りました。それはインターネットによってコーディネートされ、プレア・ウインドウと呼ばれました。何が起ったのはその祈祷のせいなのか、それともそうではないのか、皮肉といえば皮肉ですが、当事者も誰も知ることはできません。

ともかくあのとき、大量破壊兵器の国連による査察をイラクが拒否した報復として、アメリカは爆撃を開始する命令をだしていました。

合衆国の戦闘機は急派されていました。

プレア・ウインドウの間に、クリントン大統領は、これらの戦闘機に前代未聞の撤退命令を出しました。全ての兵器を使用せずに基地に戻れ、というものです。

軍事専門家は、この一連の命令に意味はなかった、と言っています。

人々の労力と軍隊と莫大な金が、すべてを何もなかったことにするためだけに使われたのです。

当時は国内問題から外交問題へと視点を移行させようとする努力が払われていました。

ちょうどクリントンが国内問題に苦慮していた頃です。

祈りについて研究している人々は、さまざまな情報が全て一般の人々に行き渡ったときに、撤退、帰還の命令が出されており、それはプレア・ウインドウが世界的規模で行われている最中だったことに注目しました。

科学者として私は、それは単なる偶然の一致だったと言うべきでしょう。

関連性がきわめて高いことを無視するなら、たしかにそう言えるでしょう。

背景の事情を無視するならば、たしかに偶然のように見えるのです。

では時々繰り返される同じような実験は、どう考えたら良いでしょう。

1970 年代にアメリカの 25 の都市で、ある研究が行われました。

人々は祈り、瞑想をして、ある感情を保つように依頼されました。

そしてその祈りと瞑想と、ある感情を保っている最中に、町で起こることが統計的に観察されました。

統計的にみて犯罪は減少しました。

交通事故など、人が被害者になるものも犯罪に含められました。

病院の救急外来は減少しました。

また株式市場のあるシカゴのような街では、株価が急騰しました。

そして祈りや瞑想や、ある感情を保つことが終わった時、統計は反対方向に推移しました。

また地球規模で平和を祈る別のプレア・ウインドウの折には、北アイルランドのベルファストで協定が調印されました。

協定は長い間、言葉をめぐり問題があつて難航していました。

双方が納得する表現が見つからなかったのです。

インターネットによってコーディネートされた地球規模の平和祈祷が行われている最中に、丁度良い言葉が見つかり、難問が解決されて協定が結ばれたのです。

ですから祈りに関するこれまでの研究を考慮すると、祈祷によって戦闘機が帰還したとは言えませんが、二つの出来事のあいだには非常に高い関連性がある、と考えて私達は満足できるのです。

この事実は確実に、更なる研究を促すことでしょう。

今後100年のあいだに祈りの研究が進み、現在よりもっと多くのことが分かるようになるのは確実だと思います。

しかし現在でもいろいろな事が分かっていますし、それを、今世界で起っている出来事に適用すべきだと考える根拠もあります。

私たちは、個々の存在の内側で達成された平和の中で祈ります。

たとえば個人のレベルでは、命にかかわる病からの奇跡的快復を祈ります。

地球のレベルでは、生命の尊厳を踏みにじるような考え方が大きく変わることを祈ります。

すべての事象は根底でつながっているように見えますし、また、祈りやそれに類する心の状態と、起こった出来事とのあいだには、高い相関関係があると考えられます。

この関係を理解するために、現代の量子力学は私たちに科学的な枠組を与えてくれます。

またイザヤの巻物（死海文書の中で唯一、完全な形で手付かずのまま発見された巻物）のような古代の偉大な文書は、私たちに祈りの原則と、それをどのように人生に活かすかについてのはっきりした方法を示しています。

スミス： 私たちが現在直面しているアフガニスタン問題において、大規模な祈祷が功を奏する可能性があると思われませんか？

ブレーデン： ええ、実は目下それが進行中なのです。

ですが、こういったことに私たちは十分慎重であるべきです。

昨今は祈りが出来事に影響することを証明する研究が少なくありません。

ですから祈りの力を知る人々は沢山いて、祈りを使って何か起こしてやろうと考える人々も大勢出てきます。

そのようなことがあるため、祈りに関してはその詳細が聖典から抹消されたり、また、預言者の学校などで高位の司祭が秘儀として伝えるだけだったのでしょうかね。

大衆に正しく理解されない可能性があったわけです。

祈りにおいて私たちは、指導者や国家に自分の意思を押し付けるようであってははいけません。祈りは、それを使って何か起こしてやろうとするものではありません。何を起こすか、よりも、自分自身のあり方が大切なのです。祈る者が生命に対して畏敬の念を抱き、自分のいる場所で・・・生活の場で、家族に対して、社会において・・・自分自身を「平和の礎」とすることが大切なのです。

繰り返していく日々の中で、学校で、教会で、愛する人々との関係において、平和を生み出す者であって下さい。個人個人が日常生活の中でそのような存在であり続けるならば、この世界の集合的な意識も、生命を尊ぶ平和なものへと傾いて行くのです。

しかし反対に、もし私たちが日々の生活の中で生命を尊ぶことなく、平和をないがしろにし・・・つまり、互いに不親切であり、この競争社会において相手に対して非情になれるならば、私たちは平和の礎とは言えないでしょう。

私たちの学校は競争心をあおるようになっており、子供たちにたいへんなプレッシャーを強いています。私たちは人間関係にも競争を持ちこみます。私たちは、自分を平和の礎だと言いきれるでしょうか？

多くの人々が古代のエッセネ派は死海文書を残したと考えていますが、そこには、ある記述があります。現在、量子論がそれと同じことを述べており、その意味するところは計り知れません。それらが述べていることはつまり、私たちを取り巻く世界は私たちの内面を映している鏡に過ぎないということです。

そこには、私たちが人生で何を起こすのか、というような、外から見て判る私たちの行動が映されるのではなく、私たちがどのような存在になっていくのか、という私たちの内面のあり方が、私たちの心の内側が映されているのです。

ですから私たちが日々を暮らしていくなかでお互いに親切であり、私たちを取り巻く世界にある生命に感謝と畏敬の念を抱くならば、世界は私たちのそのような心を反映するのです。反対に、もしも私たちが共食いを容認するような行き過ぎた競争心でもって・・・高校のスポーツだろうと、会社の会議室だろうと・・・頂点に立つためには手段を選ばず、ひどい緊張やストレスを抱えて生きるならば、世界は私たちのそのような心を反映するのです。

私たちの心の内側が世界に反映するという事は、法則と言えるでしょう。非常に微妙で、しかもたいへん強力な法則です。

世界ではさまざまな出来事が繰り広げられていますが、私たちはその全てにではなく、何かしら特定の物事に注目し、意識を向け、それと深く繋がります。そうやって自分を取り巻く世界の中から自分が選んだもの、そのものの本質が、自分の内面になっていくということをも、この法則は意味しています。

つまり、多様性を尊重する心とか、新しい考えに寛大な心、生命を尊ぶ心、そんな心の反映である物事に私たちが注目し、繋がり、理解を深めるならば、その時私たちは、そのような心で日々を過ごせるようになるのです。こういうことを話すと「それはまたえらく簡単だね」と言われます。でもそんなに軽いものではありません。

私たちは、奇跡としか言いようのない癒しのようなすをビデオに撮ることに成功しました。今は超音波のおかげで、生命の危機に瀕している人間の身体の中を、そっくりそのまま見る事ができるのです。失われた祈り方、というものがあるのですが、その方法で祈る人たちが患者の感情に照準を合わせ、その感情が変化すると、体内の状態がリアルタイムで変わって行ったのです。分単位で、わずか何分かのうち、ですよ。この、失われた祈り方は、宗教的なものではありませんし、宗派にも関係ありません。

私もそうなのですが、今や、祈りはテクノロジーなのだとは認識している人々がいます。祈りというのは、老若男女、あらゆる時代のあらゆる人々の内部に秘められた、テクノロジーです。祈りは、私たちが内面的になろうと思った存在になるための、テクノロジーです。私たちの心が、人生において生命を尊重し活かすならば、私たちの身体はそれを反映し、世界もそれを反映します。

このような観点から、9月11日に起ったこと（航空機によるアメリカ同時多発テロ事件）を考えてみましょう。もちろんあの出来事は、どんな理由があろうと容認できるものではありません。しかし、何故あんな事が起ったのかと理由を問われたならば、もしも私たちの考える量子論的な見方が事実ならば、こう答えるしかないのです。つまり、個人の身体という小さなレベルからも、人類の意識という大きなレベルからも、「彼らは加害者で悪」で「私たちは被害者で善」ということではないのです。ただ「私たち」という一つのものがあるだけなのです。

人々の意識も、世界も、私たちの人生における礎が何であるのかを反映しているのです。

私たちが信条を変えた時には、私たちが内側から変えたものがどんなものか見えてきます。それは今もう起こり始めていて、世界中の国や政府の、9月11日に起こったことへの対処の仕方に表れています。

私たちがどのようにその出来ごとに向かい合ったかを見ると、考え方や方向性が変化していることがわかって、私は勇気づけられます。変化は広いレベルで反映されてきていると思います。世界中の沢山の人々の祈りは、確かに私たちの現実に影響を与えていると思います。

9月11日、私はオーストラリアを旅行中でアメリカにいませんでした。自分の国から離れて、しかも戻りたい時に戻れないというのは初めての経験でした。その経験から得たものは大でした。外国の人々の目を通して9月11日を体験することは、目からウロコの的なインパクトのあるもので、私はそれによってある意味、能力を与えられたのです。

一月後・・・実は、私思わず涙ぐんでしまったのですが・・・皆さんもそうじゃありませんか・・・爆撃が始まって西側の軍がアフガニスタン上空に達した時、そのすぐあとには市民や山岳地帯の住民に供給するための、食糧や薬品を投下する輸送機が続いていました。私はこれまでそんなことを見た事はありません。ベトナムでは起りませんでした。確か朝鮮半島でもです。第二次大戦のときもそうだったと思います。

スミス： 前代未聞のことだったと思います。

ブレーデン： それは、私たちが集合的に、ある道を選んだのだと教えてくれます。何かが大きく違っています。難民に食料が投下されるのを見て、私は力が湧いてきました。

スミス： あなたの本「イザヤ・エフェクト」からは、未来の予言や、預言者の言葉にたいへん積極的な調子を感じられます。マヤ、ネイティブ・アメリカン、エッセネ派、すべての予言や預言に対してあなたはそうですね。それは、そもそもあなたは、私たちは変えることの出来ない未来に直面しているのではなく、また、定められた悲哀や暗い運命を甘受するのでもなく、むしろ私たちは、未来に影響を与えることが出来るのだ、とお考えになっているからですね。

ブレーデン： 先人達は彼らの時代の言葉で、後世の私たちに正確にメッセージを伝えようと努力したのだと思います。

それは西洋では正しく理解されませんでした。

西洋は科学に頼っていたからです。

そして科学は私たちがそのようなメッセージを理解できるような考え方を、1957年まで提示しませんでした。

1957年になって初めて、ドクター・ヒュー・エベレット3世が「パラレル・ポッシビリティー（同時に進行する可能性）」という用語を作り出して、時間に関する新しい概念を示したのです。

私たちは時間を直線的なものと思えますから、未来があり、過去があり、現在があるというような言いかたをしますが、ヒュー・エベレット三世は、そのような時間にもう一つの要素を加えました。

つまり「垂直時間」とでも言うべき何かがあるのだ、と彼は言います。

私たちは現在のこの瞬間の中にいます。

そうです、私たちは、未来と過去と、現在のこの瞬間を手にかけています。

この瞬間の中にはたくさんの、それこそ無数の可能性があります。

私たち自身が現実を創り出しているのだ、ということを耳にします。

そう、ヒュー・エベレット三世や他の量子力学者たちが気づき始めていることですが、つまり、言うのなら、私たちが思ったことはもう創られているのです。

私たちが思ったありとあらゆることについて、鋳型のような、あるいは青写真のようなものが既に存在しているのです。

あらゆる苦しみ、あらゆる喜び、あらゆる癒し、あらゆる痛み、私たちの世界の最も深い闇から、最も輝かしい光へと至るためのあらゆる戦い、それに最も偉大な平和まで、世界の青写真がすでに、いわゆる量子ホログラムというエネルギー領域の中に、存在しているのです。

そして私たちは、実験による驚くべき証拠を手にしており、それはこの考え方を正確に裏付けるものです。

ともかく、ヒュー・エベレット博士は、一瞬、一瞬の時の内に多くの可能性が存在すると語りました。私は1970年代後半から80年代初期に国防省で航空宇宙の仕事をしていて、科学畑の人間であり、地質学者の立場でいたわけですが、同僚にこの手の預言の話をするとう、話し始めた瞬間に皆の目がどんより曇ってしまったものでした。

科学は予言なんて言葉すら認めていないのですから当然かもしれませんが、その一方で、科学は今日、大真面目に予言を取り上げているのです。

科学者たちは、予言と言わずにすむ新しい名称を使います。

リモート・ビューイングです。

リモート・ビューイングの研究は、1971年にスタンフォードの研究所で始まりました。

そこではリモート・ビューイングを、軍の調査のための実用的な方法として研究しました。

そしてそれは実際に 1990 年から 1991 年の湾岸戦争で、イラクにおけるスカッド・ミサイルの的中率を高めるために利用され、おかげで兵士の命を危険にさらさないですんだのです。たいへん効果的でした。まるで古代の予知能力者や預言者が、実際に空から透視しているようでした。

預言者たちは、「私はひどい破壊と死と苦しみの時を見えています」と語ります。同じ時に、「私は世界が、平和と癒しと喜びの時を迎えるのを見えています」とも語り、それが同時なものですから、学者たちを大いに戸惑わせます。学者たちはこれを、同一線上にある記述だと考えがちです。ですからいつも学者たちは、これを「苦は楽の種」と解釈してきました。良い時代を迎えるためには、苦難の時代を耐え忍ばなければならないと言うわけです。また伝統的ネイティブ・インディアンの解釈では、「癒される前には浄化の過程を経る」のです。キリスト教的伝統においては、「平和に至るためには試練に耐える」のです。

こういったものは、一つの解釈です。私が思うに、このあたりのことはこうなのです。つまり、量子力学的に言うと、古代の預言者はその時代の言葉で多くの可能性について述べていた、ということです。そして注意深く読んでいくなら、預言者が私たちに、どういった行いをすべきかについて、訴えかけていることが分かるでしょう。彼らは、お願いだから、これこれのことをしなさい、そうすれば私が見たビジョンにあった最悪の事態に苦しまずにすむのです、と言っているのです。

エドガー・ケイシーでさえそうです。彼の預言を見てみると、千年紀を穏やかな変革の時だとみえています。彼がその前に語ったような滅亡の危機がある一方で、魚座の時代から水瓶座の時代への穏やかな変化がみられると言っているのです。多くの人はそのことに注意を払いません。人はだいたい悲哀や、悪い運命に焦点を当てているのです。

スミス： その通りですね。

ブレーデン： 私がイザヤの書にこだわる理由の一つは、死海文書として知られている 800 の巻物のうち、たった一つそれだけが完全なままで発見されたからです。それが偉大なるイザヤの巻物でした。イザヤは全 66 巻のテキストに、このような法則のことを当時の言葉で記した、と私は考えます。彼は私たちを一步前進させ、その法則について私たちに述べただけではなく、人生にどのようにそれを応用したら良いのか、手ほどきしてくれているのです。

彼の時代の言葉で彼が語っていることは、量子力学がこの5年から8年のあいだに発見したことと、まるで呼応しているかのようです。

これは不気味です。

とても神秘的であり、私は、先人たちは私たちと分かち合うべき重要なものを持っていたと・・・少なくともそう見なすべきだと思うのです。彼らは未来の人々に何かを伝えようとしてきました。

それを、原始的で古臭いだとか、若干興味深いだけのものとして軽視するのではなく、そこから何かしら得られるのではないかと、いい意味疑ってかかってはどうかと思います。

言うなれば彼らは、未来の人々に何かを伝えるために人生を捧げたのです。

彼らは私たちに何を言おうとしたのでしょうか？

このような観点から、つまり量子力学的な古くて新しい観点から考えるならば、あるメッセージが見えてくるのであり、この世界のここ何百年かのうちで、今日程そのメッセージに相応しい時はないと思われるのです。

私たちは「彼ら」でも「私たち」でもなく「全員」でここに一つの世界を創っているのであり、私たちが今のこの瞬間からどこに進んでいくかについては、個人個人が全員、決定する役割を担っている、ということなのですから。

スミス： 結末が天国か地獄かは、私たち次第ということですか？

ブレードン： そうです。多くの人々が目下の状況では、にっちもさっちも行かないと感じています。

9月11日のことがありましたからね。

このままでは報復が続くだけでしょう。

一体私たちは、ここからどこへ向かおうというのでしょうか？

また1957年の話になりますが、ヒュー・エベレットⅢ世は、量子ホログラム中に存在する可能性の全ては、時々互いに接近すると言っています。

そしてこのような時には、飛躍がきわめて容易になるのです。

量子を跳躍させて、ある結果を別のものにします。

ですから、地球規模の闘争を、地球規模の平和へと飛躍させることが、よりたやすくなるのです。

彼はこのような瞬間を、選択地点(choice point)と呼んでいます。

私たちは集団として、地球規模の選択地点にいるような気がします。

私たちがどのような未来に到達するのか、それは私たちが個人として、また集団として、今という時の流れの中で、どんな生き方をする人間になっていくのかに応じて変わりつつある、ということなのです。

だから私は、私たちの政府や他の国々を見て今感じていることに、励まされるような気がするのです。

スミス：　そうですね。私はあなたの本の中の「今、このときに選択がなされ、目覚めさせられるまで、おのおのの未来は眠りにについている。」という文章が好きです。

そしてこの選択とは、私も、あなたも、皆がするものなのですね。

ブレーデン：　その通りです。私たちの手元に、西洋医学に見離された末期的症状の女性患者の、とても珍しいビデオがあります。

彼女の体内の癌を見ることができるのです。

感情的なものであり、感覚的なものでもある選択、つまりは人生の選択が体内で行われる際、身体がどのように反応するのかを、超音波で実際に見ることができるのです。2分40秒で、癌がスクリーン上から文字通り消えていき、彼女の身体は再び活力と健康を取り戻します。

西洋の科学者は、これを奇跡と呼びます。

癒しはすでにそこにある、という青写真について説明した法則を理解するまでは、奇跡でしかないでしょう。

癌の青写真も同じように存在しています。

選択は必ずしも意識的になされるわけではありません。

私たちは、いつも気付かないうちに人生の選択をおこなっているのです。

私たちの感情と、私たちを取り巻く世界との間には、対話のようなものがあります。

私たちは今、その対話に気づき始めています。

前述の女性は、それに気づいた時にこう言ったのです。

「いいわ。これからは具合が悪いと思うよりも、恐怖や怒りや妬みを感じるよりも、私の人生が再び私の手に戻ってきたと思うことにしましょう。」

そして彼女が実際にそう感じた時に、彼女の周りにいた療法師たちもまた、同じことを感じたのです。

誰も物理的に彼女に触れたわけではありませんが。

麻酔薬や、他の薬品類はいっさい使われなかったのに、全員がこの感じを共有しました。

そして死海文書には、感じることは祈りの一形態だとあります。

そこに言葉はありません。

それは人の感情による声に出されない祈りです。

創造の青写真に語りかける言葉です。

青写真は、私たちが自分自身の人生で感じたことによって現実になります。

彼女が『自分自身で力強く生きる』という感覚を得たことで、体内に生命力がみなぎり、個体レベルで身体が反応するさまが、超音波を通じて観察されました。

そして現在、統計は、同じことが集団のレベルでも起こることを示しています。

ありとあらゆる青写真が存在しています。私たちが、人生において何を感じ、何を思い、どのような人間になるかによって、そのどれかが現実となるのです。

これは、トリノの聖骸布にこめられたメッセージでもあると私は考えています。聖骸布の男性が誰だったのか私たちにはわかりませんし、科学もはっきりさせることは出来ません。キリストを特定するための科学的テストなどありませんからね。聖骸布の謎は、20世紀の科学では解明できないのです。聖骸布の男性がキリストであれ誰であれ、その人はこう言っているのだと思います。

「私の身体を包んだこの布に、あなた方へのメッセージが託されている。このメッセージを理解する唯一の方法は、あなた方は本質的にどのような者なのか、そして周囲の世界とどのように関わっているのかを理解することだ。それが理解されたとき、私が聖骸布に託したものが理解されるだろう。」
すべての法則は、互いにつながりあっているのだと思います。

スミス： あなたがご著書の中で主張なさっていることの一つに、私たちが周囲の世界の出来事に影響を及ぼせることに気がつくとき、その気づきが世界の苦しみに終止符をうつ力になる、とあります。さまざまな困難について述べる時、あなたはこのことを強調なさいます。これについて少し具体的に説明していただけますか？

ブレーデン： 1999年に、科学者や探求者、宗教的指導者、哲学者など、世界有数の知識人たちが、21世紀の最初の20年間を予測しました。私たちの世界がどうなるか、彼らは予測しました。ほとんど全員が、科学、通信、インターネットなどの分野が大きく進歩するだろうと答えました。そしてまた、まれにみる大きな苦難・・・史上最大の試練が迫りつつある危険も感じていました。

たとえば医療に携わる人々は — 北米のいくつかの大病院の医師たちでしたが — 世界の人口の3分の2が失われるに違いないと予測しました。未知のウイルスによって死滅するというのです。私たちが化学的治療薬を持っていないウイルスです。主に第三世界の、教育の行き届いていない国々で起こるだろうと、予測しました。

彼らは、気候の変化や農作物の不作、戦争や飢饉による途方もない苦難について語りました。私に言わせるなら、あらゆる可能性の青写真の中で苦難は、そうですね、一つの可能性でしかありません。それに苦難の時が来なければならない理由などありません。私たちは今ではこういった苦しみを経験しなくてもよいような、精神的なテクノロジーを手に入れているのです。

私たちには、物質的なテクノロジーもあります。
地球上の人々全てを養って余りある食糧の生産が可能です。
多くの国々や政府は、協力せざるを得ないのです。
そして私たちは、人類の運命は一握りの人々の選択にまかされているのではないことを知っています。

どこの国においても、選ばれた指導者や大統領だけに運命の選択が委ねられているわけではありません。
彼らは、私たちがどのように生きているのか反映しているのです。
ですから世界の苦しみに終止符をうって平和と癒しに貢献するのは、私たち全員の役割なのです。

スミス： 私たち全員に委ねられているのですね。

ブレードン： そう思います。
これは集団による冒険です。
ある国を本当に平和にするということは、当事者以外の誰にも出来ないのです。
停戦させることは出来ます。
兵器の使用を制限することは出来ます。
しかし平和というものはそのような性質のものではなく、人の内面から実現するものです。

今現在の状況、つまりコソボやベルファスト、エルサレムでの軍事的な調停、あるいはアフガニスタンでのそれは、世界の出来事に対する私たち全員の選択を反映していると、私は解釈しています。
私はその正誤、善悪を問題にしているわけではありません。

ただこの状況下で私たちは、調停によって時間をかせいでいるだけだということを肝に銘じなくてはなりません。
時間は、私たちがこの世界においてどのように生きるのかを、考えなおすためのものです。
そして問題は、私たちが制限時間内に自分たちのなすべきことに気がつく程に賢明か否か、ということなのです。

<2002年1、2月号より>